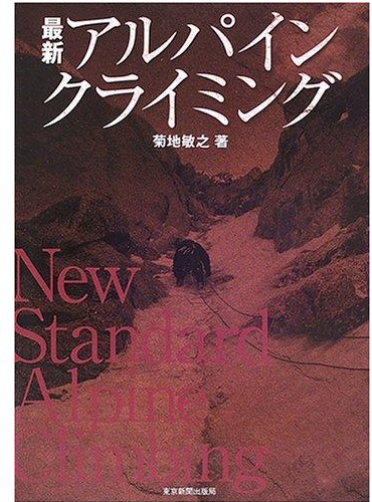


菊池敏之著『アルパインクライミング』

評判が良かった前著『最新クライミング技術』の続編であるが、内容は大幅に改定されている。紙幅の1/4をアルパインクライミングの概念（その歴史、ものの考え方、倫理）に費やしているのも他のハウツー物とは一味違う所以であろう。前著でも、数ある同種技術の中から“何故、今はこの技術を使うことが求められるのか”という切り口からの解説に力点が置かれていたが、今回は更にこれが掘り下げられているし、日頃“常識”として一律に使っている技術が、場合によっては如何に危険を孕んだものであるかも詳述されている。また、技術に関する「知識」よりも「現場感覚」の方が数等大切という視点は、とかく道具やマニュアルに頼りがちな“技術人間”には目から鱗でもあろう。



安全性確保の面でも、“「レベルを上げなくてもよいから安全に」は絶対にありえない”、“（インドアやゲレンデでは墜ちることが常識化しているが）、アルパインクライミングでは墜ちることは絶対に許されない”など示唆に富んでいる。歳を取ってくれば、とりたてて難しいルートに手を伸ばさなくても良いから安全に楽しめればそれで充分だという意識が生ずるが、前者の言はよく噛み締めるべき警鐘であろう。

諸処に挿入されたコラム風の「〇〇〇私見」も著者のクライミングに対する本心が覗いていて面白い。今回は「ビッグウォール」、「単独登攀技術」、「冬壁登攀」などの項目が追加されている。クライミングをされる方は騙されたと思って是非ご一読を。 東京新聞出版局 2006 年刊

[「山書の小溪」目次に戻る](#)